

大相模地区にかつて見られた元荒川の古川

高崎 力

戦後のことであるが、^{ひがしかた}東方や^{みたかた}見田方（現、大成町1丁目や8丁目）にある土手道の何もない河川敷側（大成町8丁目2392）に「スズセイ」（当時は、「鈴清プラスチック」工場、現在は「サンブック社」）が建った頃、ここに古い河跡が東方に向けてはっきりと見られていた。この古川は、現在の元荒川の旧流路あとであろう。つまり、現在の元荒川は、かつてはここに流れていたのである。それが、この川筋の外側（北方）へと流路を変えたと思われる。

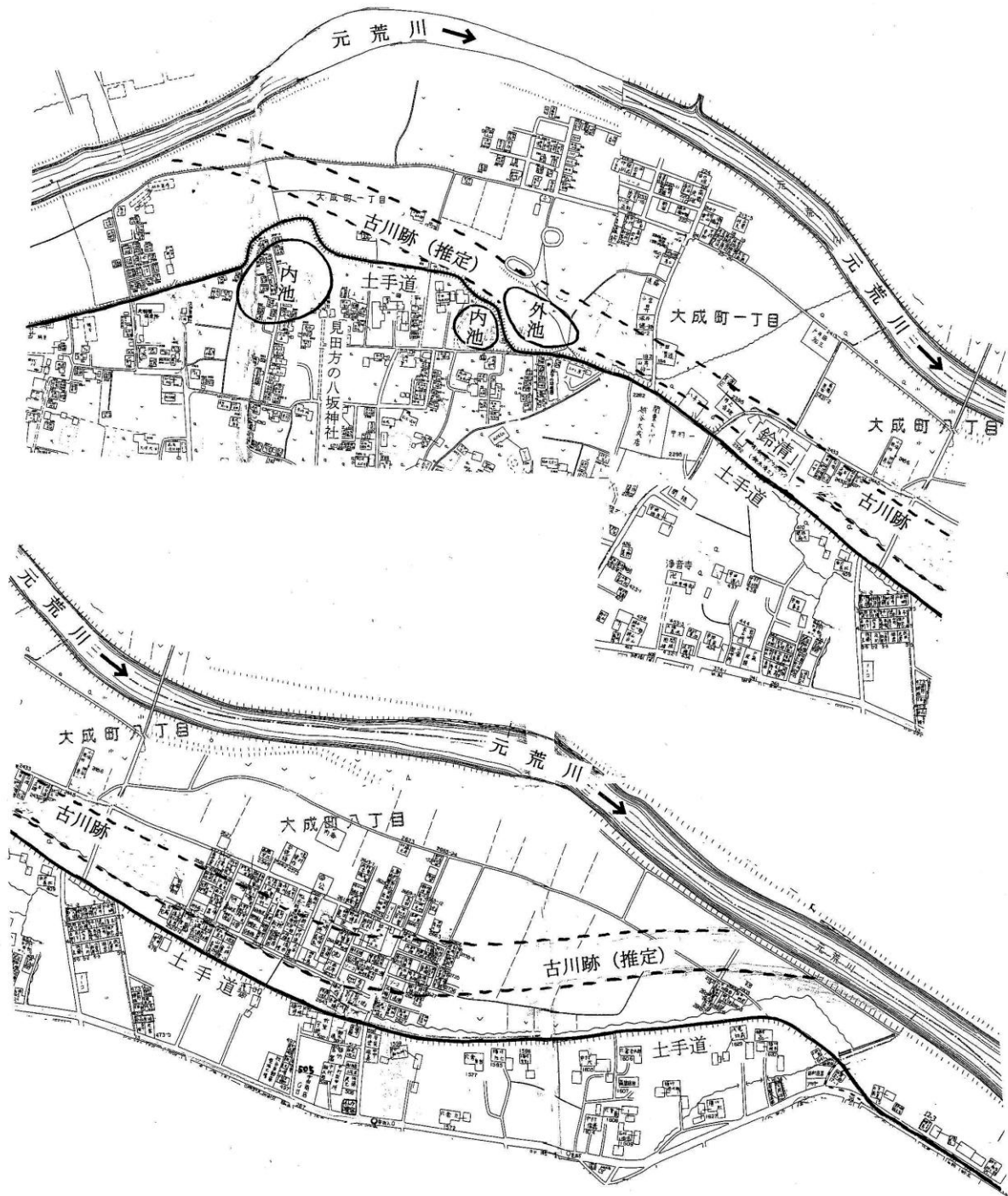
見田方の飛び地（大成町1丁目）、あやめ幼稚園の北西に外池（土手道の北、河川敷側）があった。土手道の河川敷側である。これも古川の名残と推定できる。

なお、明治の終わりごろの新聞に「臆病者」というような題名の小説が掲載されていたのを覚えている。その内容によると、大相模のこの地に偶然にやってきた作者はこの古川を「樹木が鬱蒼と茂っている中を、川が青く、黒く、気持ち悪く、水がたまっているのがずっと続いている。」というように表現していたと思う。

時代は反戦運動や徴兵検査忌避の運動があった頃のことである。千葉県野田にある愛宕神社かどこかの神社に祈願すると、徴兵（兵隊）検査が不合格になり、兵隊に行かなくて済むとのうわさがあり、作者は兵隊になりたくないがために、両国から野田に向かうのである。汽車に乗って乗り替えながら馬橋まで来て、そこで下車する。そこから江戸川筋に沿って野田に向かうはずであったが、どうしたわけか間違え、ようやく見え始めた町は野田ではなく吉川であった。地元の人に野田の行き先を聞くと、ここからだあまりにも遠いことがわかって、蒲生（現在の越谷市蒲生）に出て帰宅することにした。途中、大相模を通過するときに、八坂神社そばの「おいで堀」や元荒川の古川筋をみて感動したのである。そして、昔の蒲生（この小説では「かも」と表現している。昔は、「がもう」のことを「かも」とも呼ばれていた。）の駅（明治32年12月から明治41年2月までは、現在の新越谷駅の南寄りあたりにあった）から両国に向けて亀戸経由で帰宅したのである。

平成22年6月11日

越谷市内大相模に流れる 元荒川の古川跡（推定）



作製にあたっては、ゼンリンの住宅地図「越谷市」（昭和52年7月発行）を使用しました。